

事例項目	02 個に関する指導
概要	支援を要する生徒に対する指導方法の相談
事例提供校	高校： 西部地区 全日制 特支： 天竜特別支援学校

事例の内容	高校からのリクエスト
	・対象生徒について授業参観し、支援方法を助言いただきたいです。
	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用） ・特別支援教育コーディネーターが事例提供高校を訪問し、対象生徒の授業観察をしました。また、事例提供高校から各教科・科目の授業で見られる良い点や困っている点などについて、対象生徒の資料を提供していただきました。 ・資料分析および授業観察後、対象生徒に対する支援・指導・対応について、特別支援教育コーディネーターが話をさせていただきました。（高校：教頭、学年主任、担任、副担任が出席）

センター的機能を活用した感想	高校 担当者のコメント
	・1年生2名の授業の様子を参観していただき、視覚情報を添えて指示することや、振り返りの時間をつくるなど、各教科で困っていることへの具体的な対応方法を助言していただきました。学習できる環境づくりのため、本人達が最も困っていることに焦点を当てた個別の指導計画も作成できました。いただいた助言を参考に支援を続けた結果、2名とも入学当初と比べて学校生活や他の生徒との関係も安定し、確実な成長が見られています。
	特別支援学校 担当者のコメント ・事例提供高校のなかにも支援や配慮を要する生徒がおり、その実態や困り感について具体的に知ることができました。また、事例提供高校の「令和4年度公開授業」に本校職員5人が参加させていただきました。実際に事例提供高校の授業や個別に関する資料を見せていただいたり、関係する先生と話をしたりすることをおして、指導・支援の状況や課題について把握し、支援方法などを提案させていただくことができました。特別支援教育を進める上で、高等学校において実施可能な支援や配慮を行い、学習や生活で抱える困難さを軽減し改善することができればと思います。生徒の多様で複雑なニーズを理解し、適切な支援につなげていくために、引き続き高等学校との連携を大切にしていきたいと考えています。

まとめ
発達障害等の特徴が見られる生徒が高等学校に在籍している様子が見受けられます。インクルーシブ教育システム構築に向けて、事例提供高校においても特別支援教育を推進しています。集団指導を進める一方で、困難を感じている生徒に対する個別支援や配慮が必要になっています。支援が必要な生徒に対する指導については、様々な困難があることを理解し、一人一人の生徒の教育的ニーズに応じた関わりを教職員間で共通理解し、協力体制のもと進めていくことが大切であると考えます。今後も、高等学校からのリクエストに応じて、支援や援助に努めていきます。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事例項目	01 障害の特性理解・実態把握 02 個に関する指導
概要	一側性難聴児の聞こえに関する相談
事例提供校	高校：中部地区 定時制 特支：静岡聴覚特別支援学校

事例の内容	高校からのリクエスト
	・当該生徒の聞こえの実態を知り、聞こえに合わせた聴覚的支援及び配慮事項を確認したいです。 ・就職に向けて、本人の障害理解を深められるよう、本人に対する情報提供をほしいです。 ・一側性難聴に関する研修会を開き、職員間で共通理解を図りたいです。
	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用） ・難聴に関する担任への情報提供 ・ 静岡聴覚特別支援学校校内参観 ・在籍校訪問 ・ 担任及び特別支援教育コーディネーターへの情報提供 （聴力測定結果から分かる聞こえの実態、一側性難聴に関する情報、聞こえに関する配慮事項、就職に向けた本人の障害認識を高めるための支援等） ・教職員を対象にした難聴児支援講習会 ・ 保護者との面談

センター的機能を活用した感想	高校 担当者のコメント
	・「就職に向けてどのような支援が必要か分からない」という漠然とした相談でしたが、実態の聞き取りから今後予想される困難や対応方法について具体的な助言をいただきました。また、本人への直接的な支援に加え、職員への研修や保護者面談を実施していただき安心感を得ることができました。専門性のある学校へ気軽に相談できる制度があることは大変心強いです。
	特別支援学校 担当者のコメント ・静岡聴覚特別支援学校「きこえの教育相談だより」を見て、高等学校の養護教諭が特別支援教育コーディネーターに連絡したことで支援に繋がりました。一側性難聴の生活上の困難さは一見すると分かりづらく、当該生徒にとっても困難さの有無等の自己理解が不足している様子でした。 ・本人の周囲に理解者を増やしてより豊かに生きていくためにも、自己理解を深め、自ら困難さを周囲に発信していく力を身に付けていくとよいと思います。一側性難聴の聞こえにくさに対する理解が職場で広まり、当該生徒が同僚等と積極的に関わって活躍する姿を期待しています。

まとめ
自分では気づきにくい困難さをもちながら生活している難聴児にとっては、今回のように周囲に支援を求めていくことの大切さを本人へ伝えていくことが大切であると改めて感じました。コミュニケーション上のトラブル等が生じる前に、早い段階で自分の聞こえにくさに対する自己理解を深めていくことが必要となります。当該生徒が就職後に周囲と関わりながら自分らしく社会生活を送ることができるよう、関係機関と連携して聴覚的支援についても継続的に行っていくことが望ましいです。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事例項目	01 障害の特性理解・実態把握 02 個に関する指導
概要	集団が苦手と感じる生徒の校外学習の参加について
事例提供校	高校： 西部地区 全日制 特支： 袋井特別支援学校

事例の内容	高校からのリクエスト
	・配慮を必要とする生徒について、泊を伴う校外学習の事前、当日それぞれにおいて、班別研修や部屋割の他、見えない懸念事項も含め、配慮の具体例を教えてください。
	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）
	○入学直後より配慮の必要性を担当が感じていたというこの生徒については、記録から日常生活動作にかなりの困難さがあるようでした。自身の特性についても悩み始めている様子があり、集団行動への拒否感も顕著な状況だったため、以下の通り助言しました。 ・校外学習参加については、本人の意思を担当が聞き取り、必要に応じて合理的配慮をすることが必要です。集団が嫌だという訴えが本人から出た場合は、まず気持ちを受容したうえで、なぜ嫌なのか、ということを経験に置き換え、整理します。そうすることで生徒が自分で困りごとを整理し、必要な支援を周囲に伝える力を身につけられるようにします。その他、参加の場合、自分で使える支援ツール（スマートフォンを活用したスケジュール管理やメモ機能）や紙媒体のしおりの項目を紹介しました。校外学習中の予想される困りごとについてもリストを作成して提案しました。

センター的機能を活用した感想	高校 担当者のコメント
	・事前に班別学習は一人で行いたいという本人の訴えを聞き出し、学校も一部了承しました。特に大きな問題もなく校外学習を終えることができました。高等学校の校外学習は、参加しない選択をする生徒もいる中、本生徒にとっては成功体験となりました。
	特別支援学校 担当者のコメント
	・高等学校の段階になると、保護者も生徒も困りごとは努力で補っていく必要がある、と捉えているケースが多くあります。高校生になると、実際に自分の特性について整理しきれないまま、表面上は大きなトラブルもなく、なんとか自己解決をしながら過ごしている生徒も少なくありません。怖いのは2次障害です。このケースの場合、担任が生徒の特性に気づき、記録を取り始めたことが、周囲の教師の理解につながったのではないかと考えます。

まとめ
・生徒が不安や悩みを打ち明け、学校がその訴えの一部を受け入れるという対応をしたことで、生徒は「気持ちを打ち明けてよかった」と感じ、苦手な集団での学習に参加できたのだと思います。今後も、気になる生徒についての記録を取り、担任や部活動の顧問等関係の教職員で情報を共有し、コーディネーターや管理職を含めた学校体制としてできることを考えながら実践することで、生徒の成長が期待できるのではないかと思います。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事例項目	02 個に関する指導 06 ケース会議
概要	授業中にこちらの指示や説明が理解できているのか不安がある生徒への相談
事例提供校	高校： 西部地区 全日制 特支： 掛川特別支援学校

事例の内容	高校からのリクエスト
	・提出物や課題が出せない、何をするにもテンポが遅い、授業中の居眠り、取り掛かりに時間がかかる、機械などへすぐに手がでるため危険、時々泣いて言い訳にくる等の生徒に対して、授業を参観し、実際に本人の様子を見て助言が欲しいです。
	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）
	・ 1 回目 ・ 高等学校訪問、当該生徒の授業観察をしました。 ・ 主訴の聞き取り及びそれに対する個の捉え方や改善策の提案をしました。（副校長、担任、その他の関係教職員全 6 人参加） ・ 2 回目 ・ 高校等学校訪問、当該生徒の参観つまずきの拾い出しと評価をしました。 ・ 授業者への質問とつまずきの評価と解説、改善策の提案をしました。 ・ 願いの引き出しとその共通理解への介入及び組織化への提案をしました。（副校長、担任、その他の関係教職員全 6 人参加）

センター的機能を活用した感想	高校 担当者のコメント
	・助言を受けて授業内の困り感がかなり減少しました。上手くいっている点の確認をしました。少人数や興味のある科目を少しずつ区切ってやらせるようにしました。（レポートは 1 日 1 枚ずつ実施）家庭で学習をするのではなく授業や放課後の学校の時間内でできる範囲で課題をやらせました。時間を短く区切って達成感や成就感を味あわせることが有効でした。
	特別支援学校 担当者のコメント
	・手立てで評価できる面を引き出しました。放課後残る習慣がついているのでその時を利用して指導しました。教師が指示するときは、その場でノートに記入させました。課題を他の生徒より早めに出す等の手立てを立てたことで生徒の変容が見られました。まずは、教師の見方や捉え方を変えることが大切です。

まとめ
・ 教師自身の困り事を明確にすること、その困り事を声にあげること「困り事を共有できる教師チーム」ができました。「困り事を共有するとチーム」と「改善できるプロジェクトチーム」を立ち上げました。 ・ 「改善できるプロジェクトチーム」で「つまずきの追究・分析の方法」「分析を手だてにする方法」「手立てを具体的に実践する方法」等を具体的に明示しながら現場介入する必要性があります。 ・ 「改善できるプロジェクトチーム」が実践した評価に「それでいいんだ。」等の後押し評価をすることが高等学校での特別支援教育現場には必要だと思いました。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事例項目	02 個に関する指導 05 学校体制づくりのサポート 06 ケース会議・研究協力
概要	授業中、教師の話に集中して聞けない生徒への対応
事例提供校	高校： 東部地区 全日制 特支： 東部特別支援学校

事例の内容	高校からのリクエスト
	・「注意力が散漫で、一つのことに集中できない」という特性があります。授業中、周囲に迷惑をかけることはないですが、教師の話を書き聞けない様子が見られました。学習意欲が低下してやる気が出ないのかもしれませんが、「注意力が散漫で、一つのことに集中できない」という特性かもしれません。欠席日数も増えています。適切な指導について検討したいです。
	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）

- ・ 高校訪問、当該生徒の授業観察
- ・ 特別支援コーディネーター、授業担当者等とのケース会議（学習意欲の低下、発達障害との関連、実態把握と学習の仕方に関する指導）中学校の内容がどこまでできているかテスト等で把握をします。

センター的機能を活用した感想	高校 担当者のコメント
	・ 当該生徒の実態把握（中学生学習内容）をすると、数学で文字を含む式（中学2年生程度）の計算ができませんでした。Aさんに個別指導をしていると、正負の計算からつまづきがあることがわかりました。そこで、授業を補うために、Aさんにノートを1冊用意して、計算練習から始めました。必要な時には、放課後や休み時間を利用して「計算の仕組みを理解したら、あとは宿題」という形で、1日5題を目標に取り組みました。少しずつですが、Aさんは理解が深まることで、授業中も教師の顔を見て聞くようになりました。
	特別支援学校 担当者のコメント

- ・ 学習意欲が低下している生徒は、今までの学習習慣から苦手意識を持っていて「やっても自分にはわからない」「小学校の頃から算数は苦手だったから無理」など、理解することをあきらめてしまう傾向があります。このような場合は、「やればできる」という経験を、スモールステップで達成できるように手助けをしていく方法があります。そのためには、「どこで何がクリアできないために、諦めてしまうのか」を見つけていかなければなりません。
- ・ 高等学校の先生は、数学の授業で下学年内容の習得に向けて指導を進めてくれた。その個別の関りがB君の学習意欲を高めることにつながったと思われます。これを機に先生との関係性も改善され欠席数も減ったことは彼の成長につながり、とてもよかったと思います。

まとめ
生徒の困り感を早期に発見することが大切です。それに気づいたら、本人と相談し、対応策をとり、実践・見直していくことが重要になります。そして、「本人が小さなことでうまく対処できたらほめる」という姿勢で、継続して指導・支援しながらステップアップさせていくことが効果的です。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事例項目	01 障害の特性理解・実態把握 02 個に関する指導
概要	能力の凸凹により、人間関係が築けない。文系科目の授業に参加しないこと等への相談
事例提供校	高校： 中部地区 全日制（私立高校） 特支： 静岡南部特別支援学校

事例の内容	高校からのリクエスト
	・入試の点数は単願上位の成績でしたが、面接結果は良好とは言えませんでした。入学後、教員、同級生の名前を覚え、一人でいることも苦痛ではないようです。特定生徒への興味が強く、早口、独特の話し方で興味のあることや得意分野を話し続ける傾向にあります。 ・提出物（課題）が出せないことがほとんどで、教員の注意等も受けられません。 ・板書を写すことはなく、理数系の授業には参加しますが、文系（国語）の授業は空を見たり寝たりして過ごしています。
	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）
	・迷惑行為と捉えず、「本人は困っている」を前提に対応するとよいと思われます。 ・「特定生徒と話をするのは1日1回とする」「話をする時間を3分と決めタイマーで示す」など本人と話し合い、同意を得ながらルール作りをしていくとよいと思います。 ・「人との距離」「パーソナルスペースを数値で示す」「付きまとうと相手は嫌な気持ちになる」など、可能であればSSTを取り入れていけるとよいと思います。 ・分かっているようで、実は分かっていないこともあり得る。提出物（課題）を出すことは、中学校時代とは意義や意味が異なると伝える必要があるかもしれません。 ・板書が苦手さを情報機器（音声入力アプリ、写真）等で補うという手段もあります。

センター的機能を活用した感想	高校 担当者のコメント
	・助言を受け現在、支援中。（経過が分かったところで報告をもらう予定）
	特別支援学校 担当者のコメント
	・数年後、大学入試へつながるケースであるが、本校は大学入試について詳しくないので、他校の特別支援教育コーディネーターの力も借りたいと考えました。そこで、地区別の特別支援教育コーディネーター研修会で、本事例について話題提供をしました。すると、本ケースのようことに詳しい特別支援教育コーディネーターがいたので、助言をもらいました。助言内容を相談校に伝えていきたいと考えています。

まとめ
県が示す高等学校と特別支援学校の連携グループ間で始まった相談ケースです。私立校と県立校の垣根を超えた相談ということでも意味深いと考えます。特別支援学校は校種や校内人材によって、持ち合わせる情報量や力量に違い（得意分野、不得意分野）があります。ただし、特別支援学校同士の横の繋がりの強さを生かし、他の特別支援学校に情報提供を求めることができます。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事例項目	01 障害の特性理解・実態把握 02 個に関する指導 03「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」
概要	個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成に向けて
事例提供校	高校： 西部地区 全日制 特支： 袋井特別支援学校

事例の内容	高校からのリクエスト
	・配慮を必要とする生徒について、指導の充実を図るため「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の作成を検討しています。どのように作成し、どう活用していけばいいですか。
	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）
	・個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成方法や活用について、情報交換会を実施しました。中学校からの連携シートが上手く引き継がれずに、これまでの合理的配慮が受けられないケースが少なくない現状がありますが、大学受験や卒業後の教育的支援を見据え、作成していく必要性を伝えました。生徒の実態や必要な合理的配慮を整理することや、PDCA サイクルで指導目標や指導内容などを捉えていくことで、当該生徒の特性に関わる教員で正しく共有理解するツールにもなる、ということも伝えました。作成するにあたり、保護者の理解を得ていくことも必要になりますが、全て条件が揃うのを待つ必要はないことや、実際に今の時点で作成の必要性があるのか判断に迷う状況であっても、必要性を感じた教師が準備を進めていくところから踏み出してはどうか、ということも伝えました。

センター的機能を活用した感想	高校 担当者のコメント
	・進学校の特色として、生徒は学力を積む力は持っているため、入学後しばらく経たないと問題に気付けないケースがあります。生徒はプライドもあるため、大人の支援や困りごとへの介入などが難しいこともあります。家庭の理解も大きく関係してきます。このような現状がありますが、今後高等学校の教員も、特別支援教育や合理的配慮の一定の理解が必要となります。それには特別支援学校との連携が必要不可欠だと考えます。
	特別支援学校 担当者のコメント
	・この情報交換会には高等学校の特別支援教育コーディネーター、保健課長、養護教諭が参加をしました。実施後は相談体制が整い、個別の教育支援計画作成の進捗状況やその後の生徒の様子も継続的に確認することができています。学校間交流でも関わりがある学校同士なので、今後もこの連携を深めていければよいと考えます。

まとめ
・今後も連携を深めていくことで、適切な指導や必要な支援の継続ができると感じます。また、合理的配慮を含む、特別支援教育に対する教職員への理解が進むことで、他の多くの生徒にとってもより学びやすい学校環境となっていくことと思います。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事 例 項 目	01 障害の特性理解・実態把握 05 学校の支援体制づくりのサポート	03「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」
概 要	個別の教育支援計画の作成、活用に関する相談	
事 例 提供校	高校： 東部地区 全日制 特支： 伊豆の国特別支援学校	

事例の内容	高校からのリクエスト
	・「個別の教育支援計画」を効果的に活用するにはどうしたら良いでしょうか？
	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）
	・高等学校を訪問し、授業参観や情報交換を実施しました。 ・「個別の教育支援計画」作成、活用における大切な視点について主に以下2点を助言しました。 ① 生徒自身が一緒に目標や支援内容等を考えることで、自己理解や支援を求め受ける良さの実感につながり、自己発信していけるようになる。 ② 関係機関との連携が課題解決につながる。卒業時には、「個別の移行支援計画」として進路先にも引継ぎ、関係機関と連携した支援が継続されることで生徒が安心して過ごせる。 ・「個別の教育支援計画」の書式について提案しました。

センター的機能を活用した感想	高校 担当者のコメント
	・提案された「個別の教育支援計画」は、情報が一つの書式に整理され、校内だけではなく、スクールカウンセラーや進路関係者等とも情報共有しやすいと感じました。 ・学校や生徒の状況に応じた助言が受けられたので大変参考になりました。また、自校の取組の良さも確認できました。これまで、教員の経験と感覚に頼った支援が中心でしたが、特別支援学校と連携することにより、支援の在り方や方法の見直し、関係機関との情報共有、「切れ目のない支援」の実現などが自信をもってできそうな気がしています。 ・今後も様々なことを気軽に相談できるよう、継続的、計画的に連携していけると良いです。
	特別支援学校 担当者のコメント
	・高等学校の教員が生徒を理解し寄り添う姿勢を大変大事にされており、多くの生徒が相談しやすい環境になっていると感じました。教員の思いや実践が、生徒を中心としたチームとしてより機能するよう「個別の教育支援計画」の見直しから行いました。書式を整えるだけではなく効果的な活用となるように今後も情報交換を継続し、支援方法や関係機関との連携構築等について助言しながら共に充実した支援体制を目指していきたいと考えています。

まとめ
「個別の教育支援計画」を本人、保護者、関係機関で共有しながら、活用や定期的な見直しをすることで、ライフステージに応じた適切な支援を受け、本人が力を発揮することができます。本人を中心に効果的な支援方法を蓄積し、関係機関と役割分担しながら一貫したチーム支援をすることで継続的な支援、本人発信の合理的配慮につながっていきます。高等学校と特別支援学校が連携を継続し、地域、学校、生徒に応じた最適な「個別の教育支援計画」の活用方法をみつけていきましょう。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事例項目	01 障害の特性理解・実態把握 04「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」05 学校体制づくりのサポート
概要	「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」の作成に関する相談
事例提供校	高校： 東部地区 全日制 特支： 東部特別支援学校

事例の内容	高校からのリクエスト
	・指導の充実を図るために「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」を作成するとよいと聞きますが、そもそも二つはどのようなものでどう作成し、どう活用すればよいのですか。
	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）
	(1) 個別的教育支援計画 生活全般にわたるナビについて 障害のある生徒一人一人の教育的ニーズを正確に把握し、教育の視点から適切に対応していくという考えの下に、福祉、医療、労働等の関係機関との連携を図りつつ、乳幼児期から学校卒業後までの長期的な視点に立って、一貫して的確な教育的支援を行うために、障害のある幼児児童生徒一人一人について作成した支援計画です。 (2) 個別の指導計画 学校生活のナビ 生徒一人一人の障害の状態等に応じたきめ細かな指導が行えるよう、学校における教育課程や指導計画、当該幼児児童生徒の「個別的教育支援計画」等を踏まえて、より具体的に幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応して、指導目標や指導内容・方法等を盛り込んだ指導計画です。 1 番のメリットは、チーム支援が成立することです。どの教員も同じように支援してくれると生徒が安心感を持ちます。引継ぎの資料となり、一貫性ある支援を行うことができます。

センター的機能を活用した感想	高校 担当者のコメント
	・効果があるのはわかりますが、もう少し簡単にできるのであれば、他の教員に協力を得られそうに思います。
	特別支援学校 担当者のコメント PDCA サイクルの支援が効果的ですが、特に「Action がだいじ」で考え、作成にばかり時間を費やすことがないようにしたいです。作成と活用はセットです。気づきから支援・作成は、最短で行えるようにしたいです。用紙等がいろいろインターネット等で公開されています。全部記入するのではなく、できそうなプラン、アクションの数を増やし、有効な指導をたくさん成立させるとよいと考えます。

まとめ
「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」は、効果的に支援するためのツールの一つです。このツールを作成・活用すると、チーム支援がより機能し、障害のある生徒の困難さの減少につながります。長期的な計画である「個別的教育支援計画」を立ててから、学年・学期ごとの計画である「個別の指導計画」を立てるのが原則ですが、実態によっては「個別の指導計画」を先に立てることもあります。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事 例	01 障害の特性理解・実態把握 02 個に関する指導
項 目	04 自立活動の指導 06 ケース会議・研究協力・特別支援教育に係る情報発信
概 要	問題行動を重ねる生徒の特性理解と効果的な支援
事 例	高校： 西部地区 全日制
提供校	特支： 袋井特別支援学校

事例の内容	高校からのリクエスト
	問題行動を繰り返す生徒について、特性を整理し、効果的な改善方法があれば指導に活かしたいです。
	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）
	初めに高等学校を訪問し、当該生徒について聞き取りをしました。問題行動を重ねる生徒に、学校は、問題行動への対応策を取ってきたようですが、生徒自身もなぜ問題行動を繰り返してしまうのか、理解できていない様子でした。診断や検査数値もないケースですが、特性を整理すること、問題の背景に目を向ける考え方について説明をしました。
	後日コーディネーターが高等学校を訪問し、当該生徒の体育の授業を参観しました。 当該生徒の情報を持ち帰り、自立活動6区分でその特性を整理し、自立活動課と連携して高等学校の教員が実践可能な改善策について流れ図に当てはめて考えました。 次のケース会議に参加をし、特性を自立活動6区分で捉える方法や、当該生徒が強みを活かして課題にアプローチする方法について、具体的な場面や担当を提案して説明しました。

センター的機能を活用した感想	高校 担当者のコメント
	自立活動の視点や、6区分 27 項目について、高等学校ではまだ周知が十分になされていない状況です。目に見えている問題だけではなく、その問題の背景を整理するということも、日々の教育活動の中では難しいかもしれません。しかし、今後その視点は必要になっていくと考えます。今回のような研修の機会があるとよいと思います。
	特別支援学校 担当者のコメント
	自立活動から生徒の実態を捉え、強みや弱みを整理して、系統的、段階的に学習や日常生活を支援していくことが重要です。そのため、特別支援学校では、個別の教育支援計画、個別の指導計画を作成し、活用しています。高等学校では、入学後に支援の必要性が判明したとき、関わる教員の協力を得ながら、個別の教育支援計画、指導計画を実際に作成し、活用していくことにまだ課題が多くあるようです。そこを特別支援学校が補っていく必要があると考えます。

まとめ
特別支援学校での実態のとらえ方や対応方法などについては、高等学校でも参考になるものもあるかと思います。気になる生徒についての個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成等についても、高等学校と特別支援学校間で連携を進めていくことができればよいと思います。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。